

勝天王般若經における無上依經との類似文

篠 田 正 成

勝天王般若波羅蜜經は、求那跋陀羅が梵本を建業にもたらし、それを月婆首那が請うて授けられ、天嘉六年（五六五年）に譯出したと傳えられる。同經は玄奘譯大般若波羅蜜多經第六會に相當するが、兩者は殆んど一致し、新譯は舊譯を十分に參照したものといわれている。この經には梵文も西藏譯も存在しない。無上依經は眞諦が紹泰三年（五五七年）に漢譯したと傳えられる。この經も梵文・西藏譯共に存在しないが、究竟一乘寶性論と非常に類似していることが既に論證されている。^①

さて、この勝天王般若經と無上依經との間には、大略文章もその順序次第も非常に酷似した個所が二個所にわたって認められる。しかし、部分的に異なる點もないではない。先ず第一の類似個所は次の如くである。

I 「勝天王般若經法性品」（大正八・七〇〇c）世尊。云何法性不可思議。佛言大王。在諸衆生陰界入中無始相續。所不能染法性體淨。……非有非無非常非斷。非生死非涅槃。

勝天王般若經における無上依經との類似文（篠 田）

槃非不染非淨。離一離異無名無相。（同七〇一b）
〔無上依經如來界品〕（大正十六・四六九b）云何如來爲界不可思議。阿難。一切衆生有陰入界。勝相種類内外所現。無始時節相續流來。法爾所得至明妙善。……非有非無不染淨。自性無垢清淨相應。（汝當知）。（同四七〇c）
この類似個所は長部にわたっており全文を掲げることではきないので、次に二三の例文を掲げる。

A 「勝天王般若經」一切心識不能緣起。諸餘覺觀不能分別。邪念思惟亦不能緣。法離邪念無明不起。是故不從十二緣生。名爲無相。則非作法。（同七〇〇c）

〔無上依經〕此處若心意識不能緣起。覺觀分別不能緣起。不正思惟不能緣起。若與不正思惟相離是法不起無明。若不不起無明是法非十二有分起緣。若非十二有分起緣是法無相。若無相者是法非所作。（同四六九b）

B 「勝天王般若經」諸佛如來悉知衆生自性清淨。客塵煩惱之所覆蔽不入自性。是故菩薩摩訶薩行般若波羅蜜。應作是念。我當勇猛勤修精進。爲諸衆生說。是甚深般若波羅蜜。

勝天王般若經における無上依經との類似文（篠田）

一九六

除其煩惱。（同七〇〇c）七〇一a）

〔無上依經〕 一切如來昔在因地。知衆生界自性清淨。客塵煩惱之所汚濁。諸佛如來作是思惟。客塵煩惱不_レ入衆生清淨界中。此煩惱垢爲_二外障覆_一。虛妄思惟之所構起。我等能爲_二一切衆生_一。說深妙法除煩惱障。（同四六九b）。

第二の類似個所は次の如くである。

Ⅱ〔勝天王般若經二行品〕（同七二二b）云何菩薩摩訶薩教化衆生。佛告文殊師利菩薩言。從初般若乃至後際。離功用心。說法無盡中不_レ間隙。……七十九手足滿。八十手足德字。（同七二二c）

〔無上依經菩提品〕功德品（同四七二c）何者爲_二利他_一。從無分別後智。乃至盡生死際。不_レ作思量。顯三種身說法無窮無間無量。……七十九者手足滿。八十者手足有_二德相_一。（阿難。是名如來八十種好莊嚴佛身）（同四七五b）

この類似個所に於ては次の例文を掲げるとどめる。

C〔勝天王般若經〕 文殊師利菩薩白_レ佛言。世尊。菩薩摩訶薩於何境界行般若波羅蜜。佛告文殊師利菩薩言。菩薩摩訶薩行般若波羅蜜。甚深境界。廣大境界。功德境界。文殊師利。甚深境界者。體量是無爲。不_レ可_二相離_一不_レ著_二二邊_一。脫離諸障。自性清淨。不_レ可_二思量_一不_レ可_二數知_一。不_レ與聲聞辟支佛共_一。（同七二二b）

〔無上依經〕 阿難。何者是菩提行處。三種道理顯現三身。一者甚深道理。二者廣大道理。三者萬德道理。阿難第一身者。

與五種相五種功德相應。何者五種相。一者無爲。二者不_二相離_一。三者離_二二邊_一。四者脫_二一切障_一。五者自性清淨。何者五種功德。一者不_レ可_二思量_一。二者不_レ可_二數知_一。三者難思。四者不_レ共。五者究竟清淨。（同四七二c）四七三a）

以上の様に、勝天王般若經は「菩薩摩訶薩行般若波羅蜜」の文章を加える（例文B C）などによって、般若經としての體裁を整えてはいるが、兩經の文章は全く一致しており、兩經の間に密接な關係があることは明らかである。兩經とも梵文も西藏譯も存在しない現在、梵語原典が如何に類似していたかを考察することはできないが、現存する漢譯によって兩經を比較する限り、勝天王般若經が無上依經を参照し、模倣したと思われる。その理由は次の如くである。即ち、

第一に實性論と無上依經との關係によるものである。實性論と無上依經との前後關係は「無上依經が實性論より古い」と考へる説もあるが、「實性論が他の經から引用して來た章句を無上依經は自身の經文の如く使用しており、又實性論は多くの經を引用しているに拘らず無上依經を典據としていないから、無上依經は實性論の模倣であり、實性論を基礎として經典の形式のわくの中で改造したものであらう」と考へるのが妥當であると思われる。第二に、勝天王般若經は般若經としての文章ではあるが、その説く所は法性思想即ち如來藏思想である。これは無上依經で説かれた如來藏思想を勝天王

般若經が取り入れ、般若經としての文章に書き改めたものと見られる^①。又、個々の文章に於ても勝天王般若經が無上依經の文章を般若經としての文章に書き改めていると思われる點が多い。例えば、無上依經に「説^②深妙法除^③煩惱障^④」とあるのが勝天王般若經では「説^⑤甚深般若波羅蜜^⑥除^⑦其煩惱^⑧」となっており(例文B)、無上依經の「何者是菩提行處」が勝天王般若經では「菩薩摩訶薩於^⑨何境界行^⑩般若波羅蜜^⑪」となっている(例文C)などである。第三は消極的理由であるが、漢譯年代が無上依經は五五七年、勝天王般若經は五六年と伝えられている。従つて勝天王般若經の漢譯當時に無上依經を参照することもできたであらう。

以上の如く、勝天王般若經には無上依經と非常に類似した文章が見出される。そしてこの類似は、少くとも現存する兩經の漢譯によつて見る限り、勝天王般若經が無上依經を参照し、その文章を般若經としての文章に改造したものと思われる。かつて勝天王般若經を非常に古く見る論文も發表されているが、決してそうではなく、同般若經は實性論や無上依經よりも後に成立したと考へねばならない。

1 歷代三寶紀卷九その他。

2 椎尾辨匡氏「大般若經第六分解説」(國譯一切經般若部五)。

3 開元錄卷第六。

4 宇井伯壽氏「實性論研究」高崎直道氏「無上依經の構造」

勝天王般若經における無上依經との類似文(篠田)

(印佛研八卷二號英文)。中村瑞隆氏「梵漢對照究竟一乘實性論研究」。

5 この文は實性論如來藏品(大正三一・八三五、Johnston's ed. p. 55)にもあるが、同論では引用文(漢譯は六根聚經とする)である。

6 この文は實性論法寶品(八二四a、ibid. p. 12)にあるが、同論は引用文(如來莊嚴智慧光明入一切佛境界經(大正十二・二四七a))である。

7 この文も實性論では大海慧菩薩經(大正十三・六八a)の引用文である。

8 この類似箇所は實性論では菩提品(業)功德品に相當する。

9 この文は實性論菩提品(八四三a、ibid. p. 86)に見られる。宇井伯壽氏前掲書。

10 高崎直道氏前掲論文。中村瑞隆氏前掲書。

11 勝天王般若經梵本を中國へもたらしたと伝えられる求那跋陀羅は、勝鬘經・楞伽經・大法鼓經・央掘魔羅經等の如來藏經典を譯しており、如來藏思想に精通していたことも考慮さるべきである。

12 渡邊棟雄氏「勝天王般若經に於ける法華經の準備」(佛誕二千五百年記念佛教學の諸問題)。